法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-01-03

Le journal intime de Kunio Yanagita

Okamura, Tamio / 岡村, 民夫

(出版者 / Publisher)
法政大学言語・文化センター
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
言語と文化 / 言語と文化
(巻 / Volume)
10 別冊
(開始ページ / Start Page)
131
(終了ページ / End Page)
141
(発行年 / Year)
2013-02
(URL)
https://doi.org/10.15002/00008530

Hosei University Repository

柳田国男の日記

岡村民夫

1. 柳田国男の日記の三つの生

2012年は、日本民俗学の確立者の一人である柳田国男（1875-1962）の没後50年である。私はここ数年、この碩学をもっぱら思想史の観点から研究している。そして彼の日記は、彼の思想の密かな形成を明らかにするうえで非常に役に立つと感じている。若い頃から死の直前まで日記をつけていたといわれているが、彼はごく部分的にしか日記を公刊なかった。つまり以下の10冊ほどの手帳がそれである。他のものは今日までに未刊行で、隠匿されているか失われている（『柳田國男事典』勉誠社、1996年、659-660頁）。

「柳田採訪」、1906年4月1日—3日執筆、1971年刊行。
「越後へ」、1907年5月19日—6月16日執筆、1948年刊行。
「北国紀行」、1909年5月26日—7月8日執筆、1948刊行。
「樺太紀行」、1909年9月9日—10月2日執筆、1958年刊行。
「五十年前の伊豆日記」、1910年5月18日—22日執筆、1959年および1960年刊行。
「美濃越前往復」、1911年7月7日—25日執筆、1948年刊行。
「大正七年日記」、1918年9月18日—12月31日執筆、1971年刊行。
「大正十一年日記」、1922年1年1日—6月11日執筆、1971年刊行。
「瑞西日記」、1922年6月12日—12月31日執筆、1968年刊行。
「炭焼日記」、1944年1月1日—1945年12月31日執筆、1958年刊行。

彼自身が刊行した日記は、三つの生を送ったということができる。
第一に、彼は、小さな出来事や身のまわりの観察を記すために日記をつけ

Hosei University Repository

る。

第二に、彼はのちになってから日記を読みなおし、エッセイや論考を執筆する。後年の民俗学者たちと異なり、彼は厳密な意味でのフィールドワークを実践しないが、そのかわり長時間散策したり、長期の旅行をしたりする習慣がある。彼にとり、日記は学問的価値を持っており、研究の素材を提供する。

そして第三に、彼は日記のある部分を、歳月をへてから刊行する。それは未来の研究者＝読者に歴史的資料を提供するためである、と私は考える。すなわち日記の「のちの生」のためであると。

こうした展望に立ち、非常に重要な彼の二つの日記、「瑞西日記」と「炭焼日記」を紹介したい。

2.「瑞西日記」

民俗学に専心する少し前、柳田は国際連盟において委任統治委員会の委員員として働き、ジュネーヴに2度居住した。最初は1921年7月から10月まで、それから1922年6月から1923年9月までである。「瑞西日記」は、第二の滞在の前半部をほぼカヴァーする（1922年6月12日―12月31日）。

ずっとあとになって彼がこの日記に与えた日付のない序のなかで、彼はこう書いている。

> 大正十二年の春、二度まで自分は伊太利を旅行したことがある。其頃の手帖が有るつもりで、頻りに手箱の中を捜すけれども、空襲時の騒ぎに蔵ひ亡くしたものか、又は其前にもう散乱したか、どうしても見つけ出すことが出来ない。さうして大正十一年の瑞西閑居の日の日記が出て来たのである。（「定本柳田國男集」第3巻、251頁）

このパッセージは、彼が自分の日記を何かを書くために、特に旅行記を書くために利用していたことを逆説的に示している。

「瑞西日記」は、日本人、スイス人、フランス人、イギリス人などの名前をたくさん含んでいる。それらは、政治的研究にたいへん役立つものだが、私はここである私的な側面について語りたい。柳田は、シャンペルという地区、ジュネーヴ南郊、アルヴ川の右岸の台地上の一種の田園都市に住んだ。1922

Hosei University Repository

Genève — Champel — Hôtel Beau-Séjour construit en 1907

ボー＝セジュール・ホテルの古絵葉書（Centre d'iconographie genevoise 蔵）

年6月30日までは、ボー＝セジュール・ホテルに逗留した。7月1日、そのすぐ近くのヴィラへ引っ越した。

> 午後大澤夫妻来る。いよいよカバンを提げて引越し。（借家はホテルから半町ほどの処）。林夫人も手伝に来てくれる。新しい家のベランダにて茶を飲む。夜は庭に下りて談る。（同上、257頁）

柳田は数回この心地よい庭に言及した。

「瑞西日記」は、彼がスイス・フランス国境に近い田園を長時間散歩したり、時にはサヴォアの山々の麓まで散歩したりするのを好んでいたということをも、私たちに教えてくれる。これは単なる気晴らしではなく、社会学的ないし民俗学的なフィールドワークであるはずである。ジュネーヴで彼はスイスとフランスのフォークロアに関する本をたくさん購入していた。

こうした居住と散歩の組み合わせはたいへん興味深い。東京で彼は長年、都心の市谷加賀町、つまり法政大学から遠くないところにある伝統家屋に暮らした。田園的であるとともにモダンな郊外を知ったのは、スイスにおいてなの

Hosei University Repository

だ。私はその経験が彼の人生と思想に深い痕跡を残したと考える。帰国後、彼は都市と田舎の分離を問題にし、田園都市を讃えるようになった。1927年、東京西郊の美しく新しい町、成城へ引っ越し、自分でデザインした西洋的なスタイルのヴィラに住んだ。そして武蔵野（東京西部の田園）を散歩しながら、その民衆史を省察した。いいかえれば、彼の後半生のライフスタイルは、すでにジュネーヴで芽生えていたのである。

3.「炭焼日記」

柳田は1944年から1945年にかけて「炭焼日記」を書いた。大日本帝国は1945年8月15日、敗戦した。深刻な商品不足のせいで、彼は1944年秋に成城の庭の片隅で炭焼を試みたが、成功にいたらなかった。奇妙なタイトルはこれに由来する。「炭焼日記」とは、贋の炭焼の日記なのである。

この日記は、日記の第二、および第三の生を私たちに非常によく示してくれる。老民俗学者は自分の古い日記を何度も読み返した。

［一九四四年］十月二十七日　金よう　朝から寒き雨　終日（……）一日外へ出ず、明治四十年四十一年の自分の日記を読む。（『定本柳田國男集』別冊第4巻、117頁）

［一九四五年］十一月八日　水よう　曇　夕小雨　寒し（……）二三日前から古い日記手帖類を整理して色々思ひ出すことあり。（同上、122-123頁）

70歳になった柳田は自分の人生に対して非常に懐古的になっていた、と私は想像する。

《炭焼日記》初版（筆者蔵）

Hosei University Repository

弟子で秘書でもあった丸山久子によれば、昭和20年代末か30年代初め、柳田は彼女にオリジナルの日記の清書を命じた。清彦や他の孫たちに大きくなったらこの日記を読んでもらいたいから、と説明したという（丸山久子「「炭焼日記」のころ」、『評伝柳田國男』日本書籍、1978年、216頁）。実際、この日記には清彦との散歩の記述が多く見られる……。

孫 清彦を抱く柳田国男（『柳田國男写真集』〔岩崎美術社、1981年〕より）

丸山が清書した日記を柳田清彦が読んだかどうかはわからない。序を伴った「炭焼日記」は1958年、著者の死の三年前に出版された。確かなのは、彼がそこに歴史的価値を認めるに至り、これを死後の読者へ託したということである。

出版された彼の日記の大半が、重要な時代ないし歴史的転換期に書かれているということに注意すべきである。「瑞西日記」は彼が国際連盟で働いていた頃、かつ最後の西洋生活を送っていた頃に書かれており、「炭焼日記」は、祖国の敗戦の前後に書かれていた。

後者のなかには、いくつか自己言及的なパッセージが見られる。日本人のいろいろな古典的日記を次々と読みながら、柳田は1945年11月26日月曜日にこう記す、「「満済准后日記」をよむ。義持、義政の所行、服の立つことはマックァーサーもかはらず」（前掲書、272頁）。満済准后（1378-1435）は、室町幕府の第4代将軍足利義持（1386-1428）と第6代将軍義政（1394-1441）に仕えた大僧正である。「満済准后日記」はこの時代の政治的中枢を教えてくれる歴史資料として知られている。どういう理由で柳田が15世紀の二人の将軍をマッカーサー元帥になぞらえたのか、私は見抜くことができないが、自分の日記が後世の読者にとって歴史的価値をもちうるということを知っていたことはまちがいない。なぜなら、彼自身が過去の日記の偉大な読み手だからである。

（法政大学国際文化学部教授）